

# レヴィナスにおける「顔」の意味とその源泉 — レヴィナスのユダヤ的著作からのアプローチ —

浦上麻衣子

## Abstract

This paper discusses the concept of the "face" in Levinas's *Totality and Infinity*. The face of the Other plays important role in Levinas's thinking, and makes a connection between religion and ethics. In this paper, I explore a source of the "face" in his Jewish work, *Difficult Freedom*. This approach will show that the face of the Other means the voice of the social justice.

キーワード……顔 社会正義 倫理 他者

## 1 はじめに

「顔」[visage] という概念はレヴィナスの概念のなかでもおそらく最も有名な概念のひとつであり、レヴィナス研究の初期の段階から注目され、これまで数々の論文でも言及されてきた。そして、現象なき現象とも呼べるような顔の特異な現われについても、多くの研究者たちのあいだで議論がなされてきた。顔は人間の他者の顔であるとされたり、神の顔であるとされたり、定言命法のような倫理的命令であるとされたりしてきた。こうした結論自体に異論はない。だが、これらの議論はたいてい、レヴィナスの哲学的著作の内部で思考しており、レヴィナスの言葉を同語反復することで終わっているように思われる。レヴィナスが哲学的著作とユダヤ的著作とを異なる出版社から出していたということから、それらの著作を区別し、哲学的著作に関しては哲学的著作の内部でのみ論じようとする姿勢は、ある程度は必要かもしれない。だが、レヴィナスの哲学がユダヤ教の影響を強く受けていることも事実であり、またそれゆえに、哲学の内部にとどまって思考するだけでは判然としない文脈や概念なども多くある。こうしたことから考えて、顔という概念にレヴィナスのユダヤ的著作からアプローチすることも必要な作業ではないかと思うのである。とりわけ、顔という概念は聖書との関わりを色濃く残している概念であるといわれる。このことから、レヴィナスのユダヤ的著作を紐解くことは重要であると考えられる。さらに、『全体性と無限』が出版される前の1950年から1960年の10年間、レヴィナスがユダヤ教に関する著作を多く残しているという点も、顔の概念に対するユダヤ教の影響を考える上で見逃せない点であるように思われる。こうしたことから、本論文では、1950

年から1960年に書かれた著作のほとんどが収録されている『困難な自由』を主なテキストとし、レヴィナスのユダヤ教に対する考えや、ユダヤ教に基づく思考を手がかりにしながら、『全体性と無限』において結実した顔の概念の意味を再考してみたい。

## 2 顔の認識不可能性

「顔」という概念は『全体性と無限』において、私の面前に現前するが私には認識されないという両義的な側面をもつものとして登場し、〈私〉〔Moi〕と〈他者〉〔Autre〕とのあいだに築かれる倫理的関係の結節点として重要な役割を担っている。通常、他者の顔は我々に対して現象として現われる。そして我々は他者の顔を認識することができる。しかし、レヴィナスが論じる顔は、現前はするが認識されないという両義性をもつことによって、我々の理解をはみ出していく。顔の理解の困難さはひとえに、この認識のされなさにあるといっても過言ではないだろう。

認識や見ることといった言葉を通常の意味で理解するならば、認識されない顔という表現は不可解なものとなろう。しかし、レヴィナスにおいて、認識や視覚は単なる認識作用以上の意味をもっている。そうした意味を知ることによって、顔の認識されなさという表現は倫理的な意味を帯びることになる。

認識と視覚に関するレヴィナスの理論を見るまえに、『全体性と無限』における顔について概観しておく。レヴィナスが顔によって目指すのは、大きく言って、①私のイニシアティブや権能に依存しない意味、②存在に先行する存在者を起点とした倫理的関係、③対面という直接性、という三点である<sup>1)</sup>。レヴィナスは『全体性と無限』の冒頭で、〈他者〉の顔について以下のよう定式化している。

「私のうちにおける〈他者〉の観念を越えて〈他者〉が現前する様式、我々は実際それを顔と呼ぶ。こうした仕方は、私の視線のもとに主題として姿を現わすことには存していないし、ひとつのイメージを作りあげる諸々の質の総体として自らをひけらかすことにも存していない。〈他者〉の顔は、それが私にゆだねる可塑的なイメージを絶えず破壊し、あふれる。すなわち、私に適合した観念、その観念されたものに適合した観念、つまり十全な観念を絶えず破壊し、あふれる。顔はその質によって現出するのではなく、それ自体として現出する。顔は自ら表出する」<sup>2)</sup>

顔は、〈他者〉が私に到来するしかたであり、通常のパラダイムとは異なる現われ方をする。そして、私のうちにいつまでも固定されたイメージとして残っているようなものではなく、私のうちにあるイメージを破壊し、自ら表出する。このような〈他者〉の顔は「世界に存在しない」<sup>3)</sup>と

言われる。なぜか。ここで言われている世界とは、「享受」[jouissance]に関係する世界である。享受とは、私が「他なるもの」[autre]によって自己同一化していく仕方であるが、享受における「他なるもの」がここで言う世界である。私は、何かをなしうる身体として世界のなかに住んでいる。そして同時に、「他なるもの」という糧を享受しながら自己を同一化することで世界に抗っていてもいる。こうした世界のなかで私が「他なるもの」を享受できるのは、私が本源的に場所を掌握しているからであり、それゆえすべては私の所有可能性に対して開かれている。私の所有に対して例外的に異議をとなえるのは〈他者〉だけである<sup>4)</sup>。したがって、〈他者〉の顔は私の手のうちに落ちるうるものとして世界には存在していないのである。

では、なぜ顔は見ることも認識されることもできないといわれるのだろうか。視覚と認識に関するレヴィナスの理論から、〈他者〉の捉えがたさについて明らかにしていこう。

レヴィナスは「見ることは〈同〉を越えて絶対的な他者である何者も、すなわち自体的である何者も開示しない」<sup>5)</sup>と語る。というのも、見ることもまた掴むことへ変容するからである<sup>6)</sup>。「手によって、対象は結局のところ理解され、触れられ、掴まれ、他なる諸対象へ持ち運ばれて、関係づけられ、他なる諸対象との関係によって意味作用をまとう」<sup>7)</sup>。だから、もし〈他者〉が私によって見られてしまえば、〈他者〉は私に掌握されることになり、世界という地平上に位置づけられて、「他なるもの」へと成り下がってしまうことになる。したがって、「地平において掴む視覚は、あらゆる存在の彼方から出発する存在に出会うことはない」<sup>8)</sup>のである。

さらに、視覚には「観想の図式」<sup>9)</sup>が含まれており、これによっても〈他者〉は無化されてしまう。視覚は、眼（見る者）と対象（見られるもの）を必要とするが、これに加え、対象を見るための光も必要とする。対象は「なにものか」[quelque chose]であるが、光そのものは見られないことがないため「なにものか」ではないもの、すなわち「なにものでもないもの」[rien]である。したがって、視覚とは「なにものでもないもの」、つまり「空間という「無」[rien]」との関係のなかで確立される「なにものか」との関係である<sup>10)</sup>。視覚は、このような光によって「明けわたされた」[vide]空間的な「空虚」[vide]を媒介とすることで可能となる。こうした明るみのなかに置かれ、認識されることで、〈他者〉は中立化され、主題あるいは対象となり出現する<sup>11)</sup>。

「認識された存在からその他性を奪うこうした仕方は、認識された存在が、それ自体は存在ではない第三項——中立的な項——を通して狙われるときのみ成就されうる」<sup>12)</sup>

これは、認識が、現実存在する個体を概念という一般的なものによって中立化させることによって可能となる、ということの意味している<sup>13)</sup>。存在の個性性は、一般性という光のなかで照射されることでその個性性を失い、一般的な「なにものでもないもの」となる。このよう

に、認識とは「無から出発して存在を掴むこと、あるいは無へ連れもどすこと、存在からその他性を剥奪することへと帰着する」<sup>14)</sup>。認識においては、つねに中立化された存在、すなわちつねに一般化された存在しか対象として現われず、〈他者〉がその絶対的他性を保ったまま現前するという事は不可能であると考えられるのである。

以上から、視覚や認識と〈他者〉との相容れなさが明らかになる。そしてここから、〈他者〉の顔が抱えるジレンマが浮き彫りになる。すなわち、〈他者〉の顔は、もし視覚や認識において捉えられるならば、〈他者〉の顔として現前することはできない。だが、そうした仕方では捉えられなければ、その他性を無化されることはないが、世界内では現出しえない。

このように、顔の認識は顔の無化へとつながるため否定される。では、「顔、それは諸事物のうちでお事物であり、形をつらぬくが、それにもかかわらず境界づけられている」<sup>15)</sup>、「そこにおいて〈他者〉——絶対的な他者——が現前する顔は〔……〕迎え入れる者に適合してとどまる、すなわち顔は地上にとどまる」<sup>16)</sup>といった、両義的な意味をもつ顔を、我々はどのようなものとして理解すればよいのだろうか。形を超えて自らを押しとおし、現出には還元できない仕方では現前する顔<sup>17)</sup>、了解可能な形の現出として生じるのではなく、表出する顔<sup>18)</sup>、このような顔に対して我々はどのようにアプローチすることができるのだろうか。形を見ることは対照的な、超越的なものを見ること<sup>19)</sup>とは、どのような事態なのであろうか。

ここで少し、「顔」という言葉のもつ宗教的な意味について触れておきたい。『タルムード四講和』の註において、レヴィナスの顔は「パニーム」であるという指摘が見られる<sup>20)</sup>。旧約聖書における「パニーム」とはどのような意味を持っているのだろうか。内田満氏の論文「旧約聖書における「顔」の比喩：人格概念の源泉」<sup>21)</sup>によれば、「パニーム」とは旧約聖書において登場する「顔」を意味するヘブライ語であり、旧約聖書においては「神の顔」という表現として頻出する<sup>22)</sup>。パニームには文字通りの意味と比喩的な意味があり、文字通りの意味としては、(1)動物の「顔」、(2)仮空の動物ケルビムやセラピムの「顔」、(3)人の「顔」、(4)「表面」や「前面」といった意味があるが、比喩的な意味を帯びる場合は神の顔という表現として表れてくる<sup>23)</sup>。神の顔は「神の全人格を意味していると同時に、神とイスラエルの民が人格関係を持っていることを表現して」<sup>24)</sup>おり、旧約聖書における顔もまた、現象として現われる顔ではないと述べられている。また、「顔と顔を合わせて」という成句は、たとえば、「主が顔と顔を合わせて知った」（申命記 34：10）においては、「神とモーセ相互の信頼関係として理解されなければならない」<sup>25)</sup>といわれ、「山で火のなかから、主はあなたがたと顔と顔を合わせて語った」（申命記 5：4）においては、「神との人格的対峙が知られた」と解釈されている<sup>26)</sup>。そして、「顔と顔を合わせて」という成句は、もっぱら神と神に選ばれた者との関係を記述する場合に用いられる<sup>27)</sup>と述べられている。

このように、顔が現象として現われる顔ではないこと、「顔と顔を合わせて」という表現が、レヴィナスの「対面」〔face à face〕という言葉の思い起こさせるものであること、また、顔と顔を合わせることで神との人格的対峙が知られるという点と、対面における他者との人格的対峙という事態が似通ったものであるということなど、旧約聖書におけるパニームとレヴィナスにおける顔とのあいだには類似点が多々見られる。だが、こうした類似点からレヴィナスの顔概念を旧約聖書のなかへ還元してしまうことは性急にすぎるだろう。また、レヴィナスが述べているように「ユダヤ教徒にとって旧約聖書の意味はタルムード的伝承を通して明らかになる」<sup>28)</sup>ことから、タルムードを経ていない旧約聖書の解釈によってレヴィナスの概念を説明しようとするのは、あまり意味のないことのようにも思われる。ただ、以上のような類似性から、旧約聖書における顔がレヴィナスの思想のなかで何らかのモチーフとなっているということは大いに考えられることである。

### 3 『困難な自由』から明らかになる顔の意味

#### 1 神秘性の否定

改めて、顔の両義的なあり方について考えてみる。認識されることなく現前するという仕方で現われる顔には、どこことなく私密的なイメージがつきまとう。では、顔とは何か神秘的なものなのか。レヴィナスは、この点に関してはきっぱりと否定している。

「〈非合理的なもの〉や神秘的なものとの「接触」だけが、実際、顔との関係にいつそう対立する」<sup>29)</sup>

レヴィナスは、倫理的な関係すなわち対面の関係を神秘性とは切り離して考えている。こうした神秘性と距離を置こうとするレヴィナスの姿勢は、『困難な自由』に収められた論考のいたるところで確認することができる。ユダヤ教における神秘性の否定は、主に「聖なるもの」〔sacré〕を退ける記述として現われている。たとえば、「イスラエルとイスラエルの宗教」において、ユダヤ教においては「神」は「聖なるもの」から解放されている<sup>30)</sup>と述べられている。また、「成人の宗教」では「ユダヤ教は〔……〕熱狂と聖なるものから出発する宗教の発展といわれるようなものとは対照を成していた」<sup>31)</sup>と述べられている。さらに、「場所とユートピア」では、怖れと戦きと陶酔とともにある聖なるものに特権的な宗教的経験の地位を与えようとしている若者たちに対して、「この若者たちは聖書とタルムードによって聖なるものと秘蹟に対して表明された情け容赦のない戦いを知っているのか」とレヴィナスは語りかけている<sup>32)</sup>。なぜ、聖なるものが退けられるのか。レヴィナスは聖なるものについて以下のように述べている。

「神靈的なもの、あるいは聖なるものは、人間を包み込み、人間を人間の権能と意志の彼方へ運び去る。[……] 神靈的なものは、たとえ忘我のうちにおいてであれ、諸存在がそれに参加したいと欲しないドラマへ、これら諸存在がそこに沈む秩序へ、諸存在を参加させながら、諸個人のあいだの関係を解消する。」<sup>33)</sup>

レヴィナスは、神靈的なものや聖なるものに暴力を見出している。聖なるものが持つ怖れと戦きによって、我々は我々自身から引き離される<sup>34)</sup>。これに対し、倫理的な関係には、どんな恐れや戦きによっても損なわれることのない関係の正しさがあり、そこにおいては連関の不連続性が保持され、融合は拒まれている<sup>35)</sup>。神秘性に対するこのような厳しい態度を見るかぎり、レヴィナスが顔に神秘的な地位を与えているとは考えがたい。

## 2 社会正義としての「汝殺すなかれ」

では、やはり顔は、生身の人間の顔のことなのだろうか。レヴィナスはたしかに、現実世界に存在する他人の顔を考慮している。だが、先ほど見たように、顔を視覚的にとらえることは退けられていた。レヴィナスは他人の顔のどういった点に注目し、どのような働きを見出しているのだろうか。

レヴィナスにおいて、顔とは第一に「語り」[discours] であると言われる。レヴィナスは語ることという交易を暴力なき行為として規定している。

「語ることを含むこの交易は、まさに暴力なき行為である。動作主は、まさにその行為の瞬間、どんな支配やどんな主権も断念し、応答を待ちつつすでに他者の行為に身をさらしている」<sup>36)</sup>

レヴィナスはここで、語りへと参入することを義務づけ、語りそのものを開く「原初的な語り」<sup>37)</sup>の姿について述べている。こうしたことは具体的には対面時におけるまなざしの相克として語られている。

「人はまなざしを見る。まなざしを見ること、それは自らを放棄しないものを見ることでも、身をゆだねないものを見ることでもなく、我々を自指すものを見ることである。」<sup>38)</sup>

どちらかのまなざしに吸収されることなく、自分と他人のまなざしが保たれたまま行きかうことが可能であること、こうしたことをレヴィナスは「顔を見ること」<sup>39)</sup>だとしている。レヴィナスは、分離された項同士の、互いに包含しあうことのない関係<sup>40)</sup>を、こうした対面という具体的な状況において示しているのだと考えられる。だが、単なるまなざしの相克であれば、

視覚に還元されてしまうのではないだろうか。どのようにして顔において超越的なものを知ることができるのか。

顔を見ることはレヴィナスによれば、殺人すなわち全面的否定<sup>41)</sup>への誘惑と殺人の不可能性から構成されており<sup>42)</sup>、顔を見るときは、その目<sup>43)</sup>のうちに殺人への誘惑を読み取ると同時に、「汝殺すなかれ」〔«Tu ne tueras point»〕を聞くことでもあるという<sup>44)</sup>。この「汝殺すなかれ」とは何か。「汝殺すなかれ」を聞くとは、「社会正義」を聞くことである<sup>45)</sup>と言われることからわかるように、「汝殺すなかれ」とは社会正義の声である。すなわち、他人の顔から発せられる倫理的な抵抗であり、所有することの不可能性の告知である。そして、「汝殺すなかれ」は殺人の現実的な不可能性ではなく、道徳的な不可能性<sup>46)</sup>を示していると言われる。これは、倫理的関係においては殺人はありえないという強い主張と解することができる。

社会正義の声とは、言い換えれば、何をなすべきかを知ることであると言えるだろう。レヴィナスは、何をなすべきかを知るとは神を知ることであると述べる<sup>47)</sup>。そして、倫理と神とを以下のように結びつける。

「私が神について知るすべてのこと、私が神の語ることにについて聞くことができ、神について合理的に語るすることができるすべてのことは、倫理的な表現を見出だすはずである」<sup>48)</sup>

倫理は神を見ることそのもの<sup>49)</sup>であり、「他なる意志に服従することは、至高の教授である。すなわち、あらゆる現実の基礎であるこの〈みこころ〉〔Volonté〕そのものの認知である」<sup>50)</sup>とレヴィナスは言う。つまり、他人の顔を面前にして「汝殺すなかれ」を聴き取ることとは、道徳的に善い行いとは何か、倫理的な行為とは何かを思考すること、弱き者を目の前にしたときにとるべき正しい行い、すなわち正義を知ることであると理解することができる。こうして、他人の顔と倫理と宗教との結びつきが明らかになる。

だが、顔が引き起こすのはこれだけではない。顔によって開かれるこうした新たな視座は、道徳的意識をその様態とする自己意識も覚醒させる。享受によって結実する個人はいわば篡奪者であり、内部にとどまっている。篡奪者としての個人は、「それが取り壊し、打ち砕くすべてのものを考慮せずに成長し、糧や空気や光を独占し、その本性とその存在において十分に正当化された樹」<sup>51)</sup>のようなものである。対面は、そうした自己のあり方を問いただす。

「自己についての意識は、私が自分の存在について行うような無害な確認ではない。それは、正邪についての意識と不可分である。それは、私の本性的な不正についての意識、他者に対して引き起こされた損害についての意識、私の〈エゴ〉の構造を原因とする意識と不可分であり、私が人間であるという意識と同時的である。二つの意識は同時に起きる。」<sup>52)</sup>

対面は、世界のどこかで苦しんでいる誰かがいるということに気づくこと、自分の生が誰かの犠牲のうちに成り立っているかもしれないと考えることといった「他者たちへの気遣い」<sup>53)</sup>を生み出す。「顔を見ることは〔……〕自己から出ること、他なる存在との接触」<sup>54)</sup>である。他者を気遣うこと、つまり外部へと向かうことにより、「私は単に私にとって他者が何であるかを考えるだけでなく、また同時に、そしてそれより先に、他者にとって私が何であるかを考える」<sup>55)</sup>。そうすることで、私は自分を他者たちのうちに数え入れることができるようになり<sup>56)</sup>、同時に、内部的な自己のあり方を審問することができるようになる。対面によって引き起こされるこのような自己の変革が、レヴィナスにおいては「意識を持つこと」<sup>57)</sup>であり、意識をもつことで人間同士の連帯も可能となる。こうして、自己についての意識と神についての意識とがひとつに結び合うことになる<sup>58)</sup>。

### 3 結び

以上からわかるように、顔を見るということは社会正義の声を聞くことであり、対面とは、ある意味で神と関わることである。だが、対面における神との関わりは、神との合一や融合といった神秘的なものではなく、第一に生身の人間との関係である。人間との関係は「神的なるものとの接触を成就する」<sup>59)</sup>とされているように、他人の顔を前にすることなしには、神との関係も社会正義の声が発せられることもない。そして、こうした、社会正義と合致する神的なるものとの関係、人間たちとの関係を經由した神的なるものとの関係という思想は、ユダヤ教的聖書のすべてであるとレヴィナスは述べている<sup>60)</sup>。

このように、レヴィナスの顔の概念にはユダヤ教からの影響を色濃く見て取ることができる。だがレヴィナスはユダヤ的な教えを教条主義的に押し付けようとしているわけではない。レヴィナスのユダヤ的な論考を読んでいくなかで明らかになってくるのは、ユダヤ的書物の豊穡さと近さである。「イスラエルとイスラエルの宗教」において、レヴィナスは、ヘブライ語のアンソロジーに収められた、イスラエルの何人かの著者によって書かれた宗教と国家の関連に関する論考を読んだ感想として、宗教から倫理への架橋が容易に行われていることを驚きとともに語っている<sup>61)</sup>。そして、「聖書とタルムードによって描かれた政治的、社会的状況は、律法によって人間的なるものとなされた状況の範例である。人はそこからあらゆる状況に対する正義を推論することができる」<sup>62)</sup>という考えを根源的なものとし、以下のように語っている。

「ユダヤ教の偉大な書物は〔……〕社会的存在者を織り成している無限の諸関係を何も裏切ることのない範例というかたちで表現される。それらの範例は解釈に身をささげている。〔……〕古代の諸々の範例からそれらが含む諸原理と諸カテゴリーを掘り出し、それらを新しい諸状況へ広げなければならない」<sup>63)</sup>



ユダヤ的書物は、現実とはかけ離れた過去の遺物などではなく、つねに解釈に開かれている。人は、そうした書物に記されていることを範例とし、善なる行いとは何か、善とは何かということ固定させることなく、時代、状況、相手などに応じて考え直し、そのつど定義しなおすことができるのである。レヴィナスは、こうした書物とのあいだの往還によって豊穡なユダヤ的叡智と対話しながら思考し続けることの可能性を、我々に示しているように思われる。それは、〈他者〉の顔との対面を通じて道徳的な善を知ることにも通ずる。

レヴィナスの思想は、哲学とユダヤ的な叡智によって織り成されており、その境界線はあいまいである。したがって、いずれか一方に偏ることなく、二つの著作のあいだを行きかいながらレヴィナスの思想を探求していく必要があるように思われる。そうすることで、レヴィナスの思想の深みを知ることができるだろう。

### <注>

※レヴィナスの著作から引用する場合は以下の略号を用い、引用頁数については邦訳の頁数をスラッシュ（/）のあとに併記した。

TI: *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*

DL: *Difficile liberté. Essai sur le judaïsme*

EN: *Entre nous*

- 1) TI p.44 / 上 p.82。
- 2) TI p.43 / 上 p.80。
- 3) TI p.216 / 下 p.39。
- 4) TI pp.26-27 / 下 pp.48-49。
- 5) TI p.208 / 下 p.24。
- 6) TI p.208 / 下 p.23。
- 7) TI p.208 / 下 p.24。
- 8) TI p.209 / 下 pp.24-25。
- 9) TI p.39 / 上 p.73。
- 10) TI p.206 / 下 pp.19-20。
- 11) TI p.34 / 上 p.63。
- 12) TI p.32 / 上 p.60。
- 13) TI p.32 / 上 p.60。
- 14) TI p.34 / 上 p.63。
- 15) TI p.215 / 下 p.38。
- 16) TI p.222 / 下 p.51。
- 17) TI p.218 / 下 pp.43-44。
- 18) TI p.220 / 下 p.47。
- 19) TI p.210 / 下 p.28。
- 20) エマニュエル・レヴィナス『タルムード四講和』内田樹訳、国文社、1987年、p.28の訳注〔15〕を参照。
- 21) 内田満「旧約聖書における「顔」の比喻：人格概念の一源泉」、『哲学』73、三田哲学会、1981年、pp.25-47。
- 22) 同上、p.30。

- 23) 同上、pp.29-31。
- 24) 同上、p.31。
- 25) 同上、p.39。
- 26) 同上、p.39。
- 27) 同上、p.41。
- 28) *DL* p.56/p.57。
- 29) *DL* p.24/p.25。
- 30) *DL* p.325/p.291。
- 31) *DL* p.32/p.34。
- 32) *DL* p.156/p.170。
- 33) *DL* p.32/p.34。
- 34) *DL* p.21/p.22。
- 35) *TI* p.222/下 p.50。
- 36) *DL* p.22/pp.23-24。
- 37) *TI* p.220/下 p.46。
- 38) *DL* p.22/p.24。
- 39) *DL* p.22/p.24。
- 40) *TI* pp.212-213/下 pp.31-32。
- 41) レヴィナスは、了解に見られるような暴力を「部分否定」(*EN* p.20/p.16) であるとする。これは、存在者が消滅することなく部分的に支配されるということ、すなわち所有物となるということを意味する。他方、殺人とは「全面的にしか否定できないもの」(*EN* p.21/p.17) であるといわれる。そしてこの全面的否定、すなわち殺人は、部分否定が不可能な〈他者〉という存在者に対してのみ可能であると言われる。
- 42) *DL* pp.23-24/p.25。
- 43) 「目は所有に対する絶対的な抵抗を示す。この抵抗のうちには、殺人の誘惑すなわち絶対的否定の誘惑が含まれている」(*DL* p.23/p.25)。他にも *TI* p.217/下 p.41、*TI* p.218/下 p.43 などを参照。
- 44) *DL* pp.23-24/p.25。
- 45) *DL* pp.23/p.25。
- 46) *DL* p.26/p.27。
- 47) *DL* p.37/p.40。
- 48) *DL* p.37/p.40。
- 49) *DL* p.37/p.40。
- 50) *DL* p.37/p.40。
- 51) *DL* p.155/p.169。
- 52) *DL* pp.35-36/p.38。
- 53) *DL* p.155/p.169。
- 54) *DL* p.26/p.27。
- 55) *DL* p.22/p.23。
- 56) 対面によって、私が自分を他者たちのうちへ数え入れることは、他なるもののなかで充足している享受の状態とも、他者を掌握して自己と同等のものとするとも異なっている。というのも、享受においてははまだ私は内部でとどまったままであるし、他者を掌握する場合には私は自己の存在を審問にふすことがないからである。
- 57) *DL* p.155/p.169。
- 58) *DL* p.37/p.40。
- 59) *DL* p.40/p.44。
- 60) *DL* p.40/p.44。
- 61) *DL* pp.325-326/pp.291-292。
- 62) *DL* p.328/p.294。
- 63) *DL* pp.328-329/p.29。

<引用文献>

Emmanuel Lévinas, *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, Le Livre de Poche, 2006 [Martinus Nijhoff, 1961]

(エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限 (上)』熊野純彦訳、岩波文庫、2005 年)

(エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限 (下)』熊野純彦訳、岩波文庫、2006 年)

Emmanuel Lévinas, *Difficile liberté. Essai sur le judaïsme*, Le Livre de Poche, 2007 [Albin Michel, 1963 et 1976]

(エマニュエル・レヴィナス『困難な自由』内田樹訳、国文社、2008 年)

Emmanuel Lévinas, *Entre nous*, Kluwer Academic, Le Livre de Poche, 2007 [Grasset, 1991]

(エマニュエル・レヴィナス『われわれのあいだで』合田正人／谷口博史訳、法政大学出版局、1993 年)

主指導教員 (城戸淳准教授)、副指導教員 (栗原隆教授・宮崎裕助准教授)